幼児の教育　第92巻　第10号　平成５年10月１日発行（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993 10

お茶の水女子大学
平成
1993. 9. -8
受贈
附属図書館

第92巻　第10号　日本幼稚園協会

見る目を育てる実践シリーズ

森上史朗／大場幸夫／吉村真理子・編著

子どもをどう見て、その生活をどう読みとるか、たくさんの実践とそれに添えた分析のコメントを通して保育を考える。新教育要領の基本に沿った実践と指導の集大成。

①子どもを見る目　**②保育実践を見る目**
③保育計画・形態を見る目　**④保育の現在を見る目**
⑤問題行動と障害を見る目

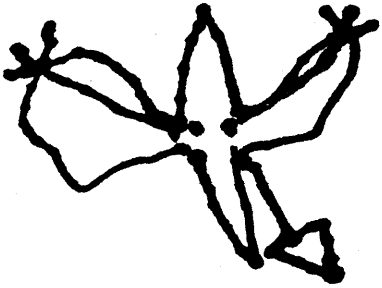
A5判 224-236頁 ①定価1,900円(税込)②～⑤定価各1,751円(税込)

セット定価8,904円(税込)セットケース付

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第92巻　第10号

幼児の教育　目次

――第九十二巻　第十号――

写真・子供讃歌……（4）

ことばを使うこと……津守　真…（6）

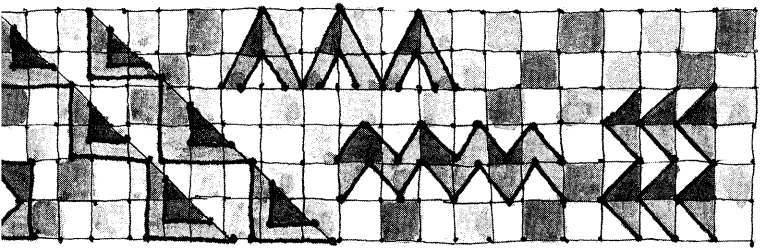
なぜ幼稚園で運動会をするのか……柴崎　正行…（10）

運動会～日常の保育に根ざした行事として～……上坂元絵里…（19）

第46回日本保育学会報告　I

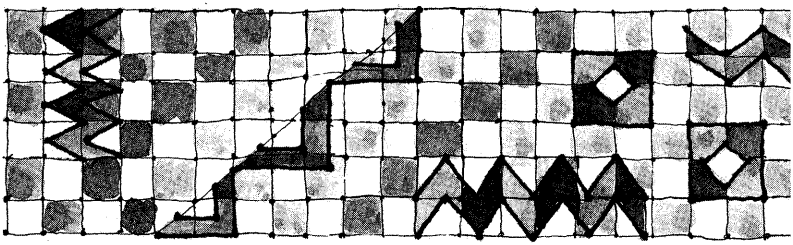
国際化時代と幼児教育……宮原　和子…（24）

© 1993
日本幼稚園協会



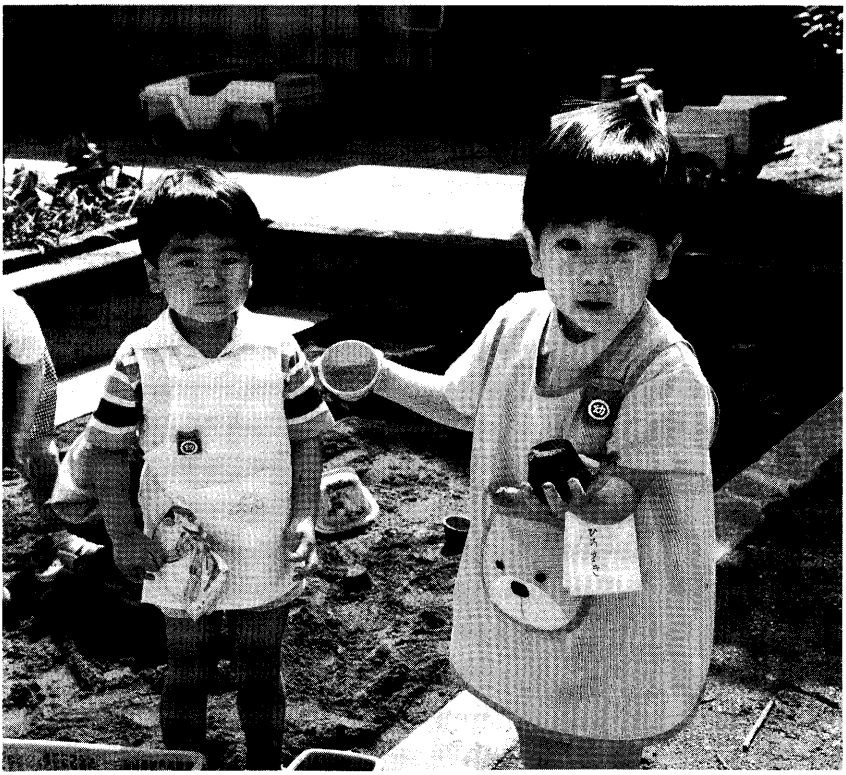
第46回日本保育学会報告　Ⅱ
けんか場面と保育者～三歳児のクラスで～……中村万紀子…（33）
故国を後にして(7)　子どもたちの詩(二)……モーレンカンプふゆこ…（41）
堀合先生に学ぶ(7)……立川多恵子…（46）
ある日の育児日記から(34)……佐藤　和代…（54）
婦人宣教師、ミセス・プラインの「おばあちゃんの手紙」(10)…小林　恵子…（55）

表紙・紺野　千秋／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／田代　和美
田中三保子・岩上　節子
編集部・大沢　啓子



子供讃歌

撮影・平野　清



みて　みて！　できたよ

ことばを使うこと

津守　真

ことばの達者なY夫と、私は弁当を食べていた。Y夫は普通の幼稚園に通っていて、その日、たまたま、弟と一緒に来たのだった。急にY夫が「泥棒だ、泥棒だ」と大声を上げた。私は何が泥棒なのと問い返しながら、Y夫が指さす方を見た。M男が後ろのソファーに座っていた。それでさっき、私共のわきを人影が通り過ぎたのは、M男だったのだろうと気が付いた。そのときに、Y夫の食べていたソーセージパンを、ひとかじりしたに違いなかった。私はY夫に、「Mくんは、あなたのパンがおいしそうだなって、ひと口もらっ

たのでしょう」と言うと、すかさずにY夫は「ひと口じゃない、ふた口だ」と言った。私は思わずおかしくなって、ことばをよく操るY夫と話を交わしていた。Y夫は、自分が使っている玩具を他の子にさわられるのも特別に苦手である。Y夫と話しながら、私はソファーに座ってこちらを見ているM男のことが気になっていた。そして急いでM男の脇にいくと、M男はやにわに私の顔と首を引っかいた。私は、ことばを話さないM男が、この場面で最も傷ついていたのだと感じた。引っかくことはそれからしばらくつづき、M男の心の痛手はずっと尾を引いた。

M男は自分のことを泥棒と言われたこと、また、ひと口じゃない、ふた口だと言われたことに心を傷つけられたのだろう。Y夫のパンはとられたわけではなく、ほんの少しかじられたか、さわられたのだと思う。私は、それが「泥棒」ということばで解釈されたことに、釈然としない思いを抱いた。子どもも、ことばで自分を正当化する。実際にはそんな大げさなことではないのに、自分の方が正しいということをことばで相手に印象づける。ことばは良いものだが、そういう魔性を発揮することがある。それは子どもに限ったことではない。

また、日頃、大人と子どもとのやりとりの中でも、大人は不注意にこういうことばを口にして子どもをたしなめる。しかし、これからの世の中ではとくに、相手を敵と認識させ

るようなことばに対して、私共大人は注意深くせねばならないと思う。

M男は、ひと口じゃない、ふた口だと言われたことにも、自分を理解されなかったとの思いを抱いたに違いない。ソーセージの好きなM男は、これでも最大の自制心をはたらかせていたのではなかろうかと私は後になって思った。その自制心は評価されずに、自分に対する批難が倍になって戻ってきたのである。

その上、この場面での私の応対の仕方も十分でなかった。私はことばの達者なY夫と面白そうに会話しているようにM男には見えたと思う。ことばを話さないM男は、疎外感を味わっていただろう。Y男はM夫に対して怒っていたのではなく、その私に対して怒っていたのかもしれない。ことばを話さない子どもは、ことばでごまかされない。自分の周りで起こっている出来事に、身体のまるごとで感じとっている。そこで子どもが傷ついていることに対して、その子どもの見ているところを代弁して、それをことばにできたら、——それは実際の保育の場面でとっさに考え出すことはとてもむつかしいことで、ほんの少しずつでも、これから私はそれをできるようになりたいと思う——。そうしたら、子どもはもっと納得して、その事態に対処することができただろう。ことばを話せる人は、ことばを話せない人に対して、その分だけその人の代弁者となって、足りないところを補ってあげなければならないのだと思う。できない部分をできるように教育するというのは、ある限界内のことである。どうしてもできない部分は、他人が補って、お互いにそうし

合って皆でたのしんで生活できるようにするのが、異質な人間が集まる社会での生き方であろう。そう考えると、幼稚園や学校での社会生活も、大人の社会生活も、もっと楽に生きられるのではないか。

（愛育養護学校）

なぜ幼稚園で運動会をするのか

柴崎　正行

一、何のために運動会をするのだろう

現在どこの幼稚園でも当たり前のように行っている運動会ですが、何のためにいつ頃から行われるようになったのかということを調べてみると、案外まだ知られていないことが多いようです。

例えば幼稚園で行われている運動会が一年のうちどのような季節に行われるかを見てみると、春と秋という二つの時期にわかれていることがわかります。秋に運動会をするのは体を動かしやすい気候だからという理由が考えられますが、春というのはどうも解せません。

ここで実際に春にも運動会をしている幼稚園の先生方に理由をたずねてみると、この園の伝統行事として小学校と合同で行っているのですが理由はよくわかりません、という答えが多く返ってきます。まだ入園して間もない子どもたちに練習をさせるのは無理があるのでした

くないのですが、やめるわけにもいかないので、という話さえ聞かされます。

このように辛いことも多いのになぜ五月とか六月頃に運動会をするのだろう。その理由は何か。またいつ頃から春にもするようになったのだろうか。それは秋の運動会と意味がどのように違っているのだろうか。幼稚園の運動会に関する疑問と興味はますます広がってきます。

いろいろな幼稚園で運動会の話を伺っているうちに、春に運動会をする幼稚園のほとんどが小学校に付設している公立幼稚園であることに気付きました。しかも小学校との合同運動会という形で行っている園が多いのです。まれには春に単独に運動会を行っている幼稚園もありますが、それは日曜日に保護者も一緒になって参加する地域のお祭り的な要素が強いことにも気付きました。

幼稚園の運動会に関する疑問はまだまだあります。運動会の内容を見ていると、徒競走、玉入れ、綱引き、踊り、リレーといった小学校と同じ内容を行っている幼稚園が多いのですが、いつ頃からこうした内容を取り入れたのでしょうか。最近ではこうした競技的な要素を少なくして、練習をしなくてもその場で楽しめることや親子で楽しめる内容に変えている幼稚園も増えてきました。

いったい運動会の内容としては何を大事にすればいいのか、幼稚園の運動会に関する疑問はますます大きくなります。そこでわが国の幼稚園の運動会に関する歴史を調べてみることにしました。その結果いろいろと興味ある事実が明らかになってきたのです。

二、わが国の幼稚園における運動会のはじまり

わが国の幼稚園においていつ頃から運動会が行われるようになったのかという運動会の起源は、どうも明治中期にまでさかのぼれるようです。

長野県松本市の開智学校附属松本幼稚園は明治二〇年に開設されましたが、その開智学校では「児童ノ就学ヲ奨励シ、師弟ノ関係ヲ親密ナラシメ兼テ活発ノ気質ヲ養成スル」という目的で毎年四月に運動会を実施していま

した。これは少し離れた場所に出かけて行き、そこで運動をするという、郊外遠足と運動会を兼ねたものでした。明治二四年四月十八日の学校日誌には「春季大運動会ヲ北深志岡ノ宮ニ開ク……四中隊二十九小隊ニ分チ別幼稚園ヲ遊軍トス。……」と記載されており、松本幼稚園は松本尋常小学校の組織の一部に位置づけられており、すでにこの頃から運動会にも一緒に参加していたことがわかります。またこの明治二四年記述が、現在のところわが国の幼稚園における運動会に関する一番古い記録になるようです。

このことから小学校に付設していた幼稚園では、すでに明治二〇年代から運動会に参加していたこと、また春の運動会は就学奨励、生徒の関係を親密にする、活発な気質の養成という三つの目的があったことがわかります。明治二八年からは秋の大運動会も城山で行っており、この年から春秋二回の運動会が行われるようになりました。

また松本幼稚園の明治時代の「保育日誌」には、運動会は幼稚園も含めた全校で近くの山や寺社に行き、行き先で自由に遊んだり兵隊遊びや鬼ごっこをしたり、教師の用意した旗取りをして過ごしたあと、褒美にパンなどをもらって帰ってきたというような記録が頻繁に書かれていますが、この頃の運動会は、遠足と運動遊びを合わせたようなものであり、軍隊式の行軍と競技を行うことにより意識の高揚を図るという意味合いがあったようです。したがっていまの運動のように人に見せるために行うというような意味はまだなかったようです。

明治中期の幼稚園における運動会の記録は少ないのですが、もうひとつ『徳島大学学芸学部附属幼稚園七〇年史』に、明治二九年八月に「春秋両期に運動会を挙行する。」という記事があります。それに続いて「本年は特に遊戯具、運動具を増加する。」という記載があることから、すでにそれ以前から運動会を挙行していたことが推測されます。

そこで徳島市内の小学校における運動会の歴史を調べてみますと、徳島県師範学校附属小学校と近隣の小学校

はすでに明治十七年から連合運動会を開いていたことがわかります。その種目は綱引き、徒競走、宝拾い、的打ち、玉入れなどという今の小学校の運動会と同じような内容であったようです。附属幼稚園はそこに一緒に参加して運動会を行っていたと思われます。

このようにわが国の幼稚園における運動会のはじまりは、小学校に付設された幼稚園が小学校の運動会に一緒に参加することに起源があるようです。しかもすでにその頃から春と秋の二回の運動会が行われており、春の運動会は生徒の関係を親密にするという意味があったようです。

三、幼稚園における運動会の普及

ではわが国の幼稚園において中心的な存在であった東京女子高等師範学校附属幼稚園では運動会をどのように行っていたのでしょうか。その経緯については柏原氏（一九九三）が詳細に調べています。

それによれば、附属幼稚園では明治三五年の十一月に幼稚園で父兄懇談会を開き、同時に運動会を催して参観してもらったということです。また次の年である明治三六年には、幼稚園でも春の運動会を開催するようになり、秋の運動会は前年と同じように父兄懇談会と運動会を兼ねて行いました。

この東京女子高等師範学校附属幼稚園の運動会の特色は、幼稚園の園庭を使って幼稚園独自で行ったことと、父兄に参観してもらうことを目的にして行ったことです。そのために内容も唱歌や競技、遊戯が中心であり、年齢別に行っていました。これは現在の幼稚園で行われている運動会の原型に近いものであるといえるでしょう。

附属幼稚園の運動会は大正時代になると、春秋に行われた他の附属学校との合同運動会に参加するものになり、単独で行われることはなくなりました。なぜ単独で行わなくなったのか、その理由は現在のところまだわかっていません。

東京市の小学校の運動会の歴史をみると、明治二〇年代から広場や公園などで地域の学校が合同して連合運動会を行っていたようです。港区の運動会の記録によれば明治後期には参集者が三千、六千という規模になり、児童や保護者はもとより地域の住民にとっても楽しみな行事になっていたということです。その内容をみると現在の小学校の運動会とほとんど同じ内容であり、競走や競争、遊戯や唱歌、体操や綱引きが中心であることがわかります。

こうした連合運動会に幼稚園児がいつ頃から参加していたのかははっきりしませんが、明治末期の根岸幼稚園の運動会の写真には、円形になって行進または遊戯をしている様子が写っています。またその周囲では多くの見物人が見ています。これらのことから、近くの公園などでおこなわれた小学校などの連合運動会に幼稚園も一緒に参加して、簡単な遊戯などを演じていたことが推測されます。

東京市京橋区月島幼稚園では、毎年十月中旬ごろ近くの大運動会において佃島小学校と合同で運動会を行ったということです。幼児は芝生の上に筵を敷いて、普段見馴れないお兄さんや、お姉さんたちの、体操や、競技に拍手を送っていたそうです。また自分達も、遊戯、団体競技、徒競走の三種目に参加したようです。

こうしたことから東京での公立幼稚園では、大正時代から昭和初期にかけて小学校などの連合運動会に参加するようになったと思われます。また記録からは、やはり昭和初期には私立幼稚園も合同運動会に参加していたことがわかります。例えば私立瑞穂幼稚園では昭和初期から近くの小学校の運動会に毎年招待され、遊戯を演じに参加していたということですし、私立東洋英和女学校附属幼稚園でも昭和六年には小学部の運動会に参加していたということです。昭和十二年の日誌によれば運動会での幼児の参加種目は旗の遊戯、風船競争、紅白まり入れであり、午前中のみの参加であったことが記されています。

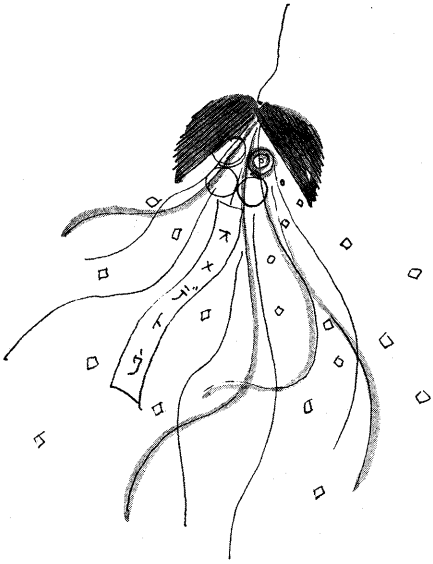
わが国の幼稚園における運動会の普及は地方でもみら

れます。大正時代に徳島市内に開設された四つの幼稚園では、毎年連合運動会を開催していたという記録が残っています。また長野県の小学校においても明治三〇年代から地域の行事として連合運動会が盛んに開催されるようになりました。そうした影響もあり、はじめに紹介した松本幼稚園でも運動会の形が郊外遠足的な色彩が次第に薄れていき、大正年間には園児たちも地域の運動会に参加して、観衆の前で遊戯をするようになり、いわゆる見せる運動会にかわっていったのです。

四、幼稚園だけで運動会を行うようになる

しかし松本幼稚園の昭和初期の日誌になると、運動会について大きな変化がみられるようになります。それは地域の運動会に招待されて参加することの弊害が認められるようになったことです。そこで松本幼稚園では、昭和二年六月には県営運動場において初めて幼稚園だけで運動会を行うようになったのです。

その時の種目は、遊戯「朝のつとめ」「電車」、競争「まり送り」「旗送り」、遊戯「金太郎」「まり送り」、競技「旗送り」「綱引き」「バスケットボール」等でした。すべての種目が終わると、参観していた父兄と一緒に弁



当を食べ、紙屑を拾った後、父兄と共に電車に乗って帰ったということです。そして昭和四年には初めて幼稚園の裏庭で運動会を行ないました。これは松本幼稚園にとって初めて自園の園庭で独自に行った運動会でもありました。

このことから昭和初期からは合同運動会や連合運動会の弊害が認識され、独自で運動会を開催する幼稚園が出て来ていることがわかります。

京都市の市立豊園幼稚園では、大正六年に幼稚園の園庭と思われる場所で輪になって鳩の遊戯をしている園児の写真があります。日章旗や他の旗が飾られており、周囲で多くの観客が見ていることから運動会の写真であると思われますが、エプロン姿の幼児が演じているので、豊園幼稚園で開催された運動会であろうと思われます。

また昭和十四年十月に私立神戸幼稚園ではすでに幼稚園単独で運動会を実施していたことが記録からわかっています。

このように昭和初期を過ぎるころには、合同運動会あるいは連合運動会に幼稚園が参加することの意義が問い直され、次第に幼稚園単独で運動会を行うことも見られるようになったのです。

昭和四年に松本幼稚園はそれまでの出かけて行く形の運動会をやめて幼稚園の裏庭で運動会を行いましたが、その記録には「照りもせず降りもせぬよき日なれば裏庭へ椅子を持ち出し、周囲へずらりと並び大喜び、お唱歌より初め、輪を首にかけて走るゲーム・遊戯・バスケットボール等各組代る代る、応援も盛んにて大分楽しき時を過ごす、お腹もすきたれば中に這入りお弁当にする、……」と書かれています。

大規模な運動会に参加し見てもらうよりも、たとえ規模は小さくても自分達で無理なく自然に楽しめる運動会にしたいという松本幼稚園の保母たちの願いがみごとに実現されている幼稚園独自の運動会であるといえます。

このように昭和のはじめ頃から、それまでの大規模に行う運動会では幼児に無理があるという弊害が反省されるようになりました。そして幼児にも無理なく楽しめる

運動会にしたいという努力が払われるようになったのです。

五、幼稚園における運動会の意義と現在の問題点

わが国の幼稚園における運動会の歴史を調べてみて、幼稚園における運動会の意義として歴史的には次のような意義があることがわかりました。

運動会は明治前期から小学校において就学奨励や意義の高揚などの目的のために行われましたが、その小学校に付設された幼稚園もそれに参加するという形で幼稚園にも取り入れられていきました。そして幼稚園が参加した最初の運動会は、現在の確認できる記録からは明治二四年に松本幼稚園が参加した運動会です。

小学校の運動会は当初から春秋二回開催されており、春の運動会には生徒間の親密を図るという意図がありました。この伝統が現在も小学校に併設されている公立幼稚園に残っており、春には小学校との合同という形で運動会を行っているわけです。したがって春に運動会を行う意義は、まだお互いに親しくなれていない子どもたちを運動によって交流させ、親密になれるようにしたということだったようです。

今の幼稚園の運動会で行っている内容が、小学校の運動会で行っている内容と類似しているのは、そもそも幼稚園が小学校の運動会に参加させてもらっていたというこうした歴史的な起源に関連していることがわかります。

幼稚園が単独で運動会を行ったのは現在の記録からは明治三五年の東京女子高等師範学校附属幼稚園の秋の運動会が最初です。その意義は、父兄に参観してもらい子どもたちの元気な姿を見せることにあったようです。しかし幼稚園で単独に運動会を行うようになるのは、この附属幼稚園の方式がそのまま広がったわけではなく、大正時代までに全国的に普及していった小学校との合同運動会や地域の連合運動会に参加することの弊害が、昭和初期頃に幼稚園関係者に認識されるようになってからで

した。幼児に無理をさせてまで大規模な運動会に参加させるよりも、小規模でもいいから幼児にも楽しめる運動会にしたいというねがいがそこにはあったのです。

現在においても、小学校も顔まけの大規模な運動会をして保護者に成果を見せている幼稚園があります。すでに明治三〇年代において東京女子高等師範学校附属幼稚園は幼児の姿を保護者に見せる行事として運動会を意味づけていました。その意義は伝統として受け継ぎながらも、あまりに運動会が練習の成果や出来栄えを見せることに偏っているのが現状ではないでしょうか。鼓笛隊や組み体操といった小学校の高学年がやるような内容を、見栄えがするという理由で幼児に厳しい訓練的な練習によって教え込んでいる現実をみると、果たしてこれでいいのかと疑問に感じます。

すでに六〇年以上前に、こうした小学校的な運動会が幼児に弊害をもたらすことに気付き、何とかして幼児自身が無理なく楽しめる運動会にしようと努力したことが生かされていないのが現実なのです。もういちど六〇年前の保母たちの努力に学び、運動会の内容も小学校の運動会と同じようなものをこなすのではなく、もっと幼児が無理なく自然に楽しめるものに変えていく必要があるのではないでしょうか。

（東京家政大学）

参考文献

柴崎正行、田代和美：わが国の幼稚園における運動会の起源について「保育学研究」一九九二　日本保育学会

柏原栄子：幼稚園における運動会に関する一考察

「日本保育学会　第四六回大会研究論文集」一九九二

松本市立松本幼稚園：「松本市立松本幼稚園百年誌」一九八七

運動会

日常の保育に根ざした行事として

上坂元　絵里

最近では、春に運動会を行う学校・園が増えているようですが、やはり運動の秋、十月は運動会があちらこちらで開かれることと思います。

私自身、子ども時代、運動は苦手な方で体育の授業や運動会には、楽しからぬ思い出が残っています。同じ運動を一斉にする授業では、得意な人は良いけれど、苦手な人は劣等感の芽を植えつけられたものです。私の場合、大人になってからは、幸い、スポーツ好きになったものの、集団生活のスタートである幼稚園生活、他者との比較ではなく、体を動かすことが楽しいと思う人になって欲しいという願いを持ちながら、運動会という行事

についても考えているわけです。

もう随分前のことになりますが、附属幼稚園で、前期六月、後期十一月の二回、教育実習をいたしました。

後期、年長組の実習の間、保育中に運動会での遊戯を複数クラス、男児も女児も大勢で楽しんでいました。担任の先生はいなくても大きな輪ができ、実習生の私も何度かその輪に加えてもらううちに、自然に振り付けを覚えられる程でした。その折、幼稚園の運動会では、練習を重ねて当日に完成されたものを見てもらうのではなく、例えば、遊戯ならば遊びの中で自然に振り付けを覚え、それを運動会が終わってからも、更に楽しめるようなものにしたいと考えるという主旨の話を聞きました。自分自身の記憶に残る運動会、何度も何度も練習をさせられ、当日が終わると、ほっとする思いばかりが残ったのとは、随分違う思いが子ども達の中に残ったのだろうと感じたものです。

現在でも、毎年十月に、午前中で終わる運動会を行っていますが、直前に、一度予行はするものの、クラス全員、あるいは園全員が集まって運動会の練習というものは、殆どしていません。

子ども達が、それぞれに自分がしたい遊びに取り組む、日々の主体的な幼稚園生活に、できるだけ自然な形で、運動会をと考えているわけです。

例えば、年長組では、近年、リレー競技をしています。保育室の棚には、リレーのバトンもおいてあり、年中組の子どもは、年長組が遊びの中でリレーをしているのを見て、仲間に入れてもらったり、あるいは、運動会で年長組の立派な姿を見て、その後自分達だけでチームを作ってやってみようとしたりしま

す。そんな経験から、年長組になると、集団で遊ぶ遊びの一つとしてリレーを繰り返し楽しむこともあります。もっとも年を追って引き継がれるとはいえ、その年によって、又、クラスによって、そうした状況にはかなり差異がみられます。

リレー遊びの中では、コース取り（花壇まわり・お山まわりなど）を決めたり、チーム分けをしたりを子ども同士で相談します。もちろん、最初のうちは、大人の手助けが必要ですぐにもめてやめてしまったりしますが、段々に自分たちで、すすめていかれるようになります。遊びといっても、子ども達の中には、勝敗の意識というのがあらわれてきますから、自分は○○ちゃんと同じチームになりたいといった例もでてきます。このような考え方も、自由に遊ぶ中で、○○ちゃんは○○が得意といった他者理解、人の良さを認め合う人間関係につながっていくようにと配慮したいと思っています。子ども達だけに任せてしまうと、いつも仲よしは同じチーム、入りたいのに違うチームになってしまう、といったことにもなりがちなので、大人も仲間に入ったり、それを機会に新しい仲間が入るようなきっかけ作りは必要になってきます。さて、それでは、苦手な人は、いつもリレー遊びに参加しないのではと思いがちですが、少し苦手意識をもった子どもでも、仲良しの子がやっているからとか、何度かやるうちに大分うまく走れるようになった等のきっかけで、参加する姿がみられます。無理矢理、皆で走らされて、ひどく苦手意識をもつのとは、大きな違いがあると思います。子ども達の中にも、最初は○○ちゃんはおそいからといった声が出ることもありますが、おそくとも一生懸命走る姿は、「○○ちゃん前より早

くなったね」といった考え方を引き出してくれるようです。

リレー遊びひとつとっても、ラインの中へは入らない事、バトンの受け渡し方等、ルールや方法を伝えなくてはなりませんが、この点も、保育者が、チームの一員として走ることで、見て真似て理解するのが子ども達にとっても自然なようです、その上で、必要に応じて個人的に指導していくとよいようです。

子ども達が、可愛い頬を紅潮させて走る姿には、思わず感動してしまうものですが、それを見守る大人たちの、ともすれば勝敗にこだわった応援をする姿などにも運動会の難しい面が感じられます。もっとも全般的には、できるだけ、勝敗が五分になるようにといった配慮での運営は、幼稚園ならではで、とても良いのではと思っています。

個々の種目について述べていくと、長くなってしまいますが、遊戯についても印象に残ったことがありました。

その年の年長組には、とても踊りの好きなM子という女児がいました。子ども同士の影響の深さは大変なもので、その子のおかげで、踊ることをとても楽しむクラスの雰囲気がありました。

運動会では、隣のクラスの先生と相談して『チキチキバンバン』に振りつけをしました。リズミカルな曲で、やや時代は古いけれど、空も飛べる万能車という、夢のあるストーリー、男の子も照れずに楽しめるのでは等、考えて選曲しました。前述したように、遊びの中で、自然に覚えてもらえるよう、振り付けもそれほど難しいものではありませんでした。

両手に二色の短いリボンをつけて踊ること

も年少組には魅力的にうつったようで、運動会後には、年少組の人たちからも踊りたいという声がたくさん出てきました。最初のうちは、年長の子ども達にまじって踊ったりしていましたが、そのうち、年少組に、年長児が数人でかけていって、一緒に踊って教えてあげるといったほほえましい光景もみられました。

ある時は、お遊戯室と呼ばれる大きいへやで、K子が年少児に踊りを教えていました。わかりやすく踊ってみせながら、年少児が踊ると、「そう、そう」とニッコリとうなづく姿は、他者を認め、伸ばすという保育の理想を実現しているようで、こちらがうっとりとみとれてしまうようでした。

M子・K子達が卒園した翌年、私は、彼女たちが伝えた『チキチキバンバン』を年中児と一緒に踊ったものです。

このように、運動会をきっかけにして、遊びの幅が広がるということもありました。

今回は、どちらかというと運動会を通しての子ども達の嬉しい育ちを中心に書いてきました。

様々の課題もあるでしょうが、日常の保育から出発し、そして、日常の保育をより豊かにするための「運動会」。

今年は、どんな運動会になるのでしょうか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

第46回日本保育学会報告　I

国際化時代と幼児教育

宮原　和子

戦後五十年、著しい経済成長を遂げた日本は、いま大きな岐路にたたされている。冷戦構造の崩壊、一千三百億ドルにものぼる貿易黒字、貿易摩擦、PKO、環境問題など、どれ一つとっても、国際的な理解と協調なくして解決できない問題である。こういった状況のなかで、日本をとりまく人や物、情報のボーダーレス化は、二十一世紀に向け、ますます大きく拍車がかかっていくであろう。このような時代に生きる子どもたちの教育も、自ずからこれまでとは異なるものでなければならない。日本において「指導」から「援助」への転換を求める、新しい『保育所保育指針』と『幼稚園教育要領』が生まれたのも、こうした時代の要請に応えたものである。家庭教育においても、時代に即応した幼いときからの教育が求められる。

二十一世紀への道

顧みれば、わが国は、明治以来、一貫して、欧米に追いつけ、追い越せの国是のもと、近代化への道を走り続けてきた。その一つは、軍隊を強くし、もう一つは、産業を興し、国を豊かにすることであった。当然、教育においても、教師が主導的な役割を果たし、生徒をひっぱっていき、そこから一人でも多くの能力のある人間を養成する「教師指導型」の教育が主眼となった。そこでは、基本的に、子ども一人ひとりの能力や興味といった個の存在は無視されたのである。

しかし、富国強兵の歴史は、昭和二十年の敗戦によって幕を閉じる。さらに、産業を興し、近代化への歩みを推し進めてきた政策も、敗戦によって大きな打撃をうけた。欧米に追いつけ、追い越せの政策は、また、一からの出直しとなった。

灰燼に帰した国土を復興し、経済を立て直し、すべての国民が食べていけるためには、ここでもまた、欧米に追いつく努力をすることが最大の悲願となった。明治の近代化に始まった「欧米に追いつけ、追い越せ」の思想は、敗戦によって、弱まることなく、さらに続けられていったのである。教育においても、社会や教育の民主化のなかでも、「追いつけ、追い越せ」教育の教師指導型の教育は、敗戦という国家の変貌を大きく変えたできごとに遭遇したにもかかわらず、明治以来一貫して変わることなく、今日に至ったのである。そしてそこから、一定の能力をもった人材が養成され、新しい製品を次々とつくり、輸出のパイオニアたちが育っていったのである。

日本では、いろんなところで、「頑張ってね」ということばが使われている。アメリカなどの諸外国では、母親がナースリ・スクールなどで子どもを送ってきたり、迎えにきたときは、「楽しんで」「楽しかった?」という。母親にとって子どもが園で楽しく“enjoy”することが最大の願いである。日本では「頑張ってね」とお母さんは激励して子どもを送りだす。毎日毎日「頑張って

ね」と送り出される子どもは一体どうなるのだろう。日本の母親も子どもに毎日頑張ってきてもらいたいと本気で考えているわけではない。心の底では、子どもの一日が楽しいことを願っていることであろう。しかし、慣用的にも「頑張ってね」ということばが幼い子どもの世界にまで入り込んでいるのは、まさしく「追いつけ、追い越せ」の思想の産物だと思われる。いつも「頑張ってね」といわれていると、その子どもは、それに馴化し、それが刺激としての意味を失い、本当に頑張らなければならないときに、その意味をもたなくなる。

こうして、明治から百年とわずかな歳月を経て、ドル換算の一人あたりの名目GNPでは、アメリカやイギリスを凌駕し、日本から世界に向かって輸出される製品は、いわゆる、「貿易摩擦」を生み出すものとなった。日米の摩擦一つとっても、貿易摩擦だけだはなく、非関税貿易、文化摩擦にまで及んでいる。これらの摩擦を解消し、日本が国際社会の一員として生きていくためには、日本人そのものが、その環境で生きていくことのできる日本人に生まれかわっていかなければならない。国際的な理解と協調なくして、これからの日本は世界のなかで生きていくことができないのである。「協調」とは、ただ単に仲よくするということではない。利害の異なる者が互いに協力しながら、問題を解決していくことである。そこでは、その問題について、主張すべきところは主張し、相手の立場に立って譲るべきところは譲る、ということである。そして、お互いが協力しながら、問題を解決していくことである。この「協調の精神」とそれを達成する技術や方法が、これからの日本に最も求められるものである。そういった精神や技能は、これまでの「追いつけ、追い越せ」の画一的な教育からは生まれてこない。幼児期の教育において、「個」を大切にする「援助としての保育」が求められるのも、そのためである。

子ども一人ひとりの『個』を大切にする保育と教育は、二十一世紀の国際化のなかで日本が生き残れるかどうかの国の存亡をかけての問題として提起されたといっ

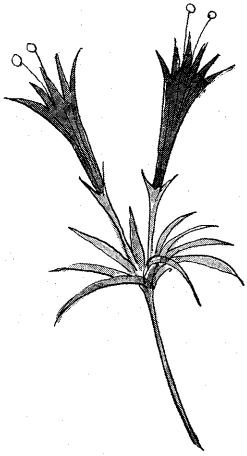
ても過言ではない。

ケンブリッジのナースリ・スクール

簡単に『個』を大切にする保育、「援助」としての保育といっても、ことは簡単ではない。その証拠に、戦後の大きな民主化の波のなかでも、画一的な教育の中味を変えることができなかったことからも明らかである。一九九二年の夏、わたくしは、イギリスのケンブリッジにある公立のナースリ・スクールを訪ねた。

そのナースリ・スクールは、人口十万のケンブリッジ市の中心部から少しはずれた、かなり住宅が密集したところにある。四歳児を対象にしたそのナースリ・スクールは、午前のクラスと午後のクラスにわかれ、それぞれが二つの教室で保育をおこなっている。

このナースリ・スクールの保育は、オープン・スクールの保育である。一つの教室は、ままごとやペインティングのような創造的な遊びや砂遊び、水遊び、粘土あそびなどができるようなコーナーが設けられている。どちらかといえば、動的な活動をする教室である。もう一つの教室は、床で積み木やレゴなどをして遊ぶコーナーや、絵を描いたり、コンピューター・ゲームや、パズ



ル、ストーリー・コーナーといった静的な活動をおこなう教室である。

ここのスタッフは、全部で九名である。園長先生ともう一人の先生は、四年制の大学を卒業し、学位をもっている、いわば、正規の先生である。さらに、ナースリ・ナースという保育者養成機関において二年の教育を受けた二人の補助教師がいる。その他に、障害をもった子どもが四人いるために特別に派遣された教師や、園長が来客や外出などで保育にあたれないときの要員としてパートの教師がいる。それに現地の中学校を卒業し、将来保育者になることを考えている十五歳の青年男女が一名ずつ来園し、保育の手伝いをしている。加えて、子どもの何人かの母親が教室のなかで、自分の子どもをはじめ、まわりにいる何人かの子どもたちと会話をかわしている。

まず教室にはいって、日本の幼稚園や保育園のクラスと大きな違いを感じるのは、教室にいろいろな、たくさんの種類のおもちゃが置いてあることである。一つの教室のなかに、あらゆる種類のおもちゃや教材がところせましと置かれている。遊ぶおもちゃでいっぱい、という感じである。教室は、子どもにとっては、なんでも好きなおもちゃで遊べる、楽しい場所である。しかし、おもちゃや遊具は、ただ雑然と置かれているのではない。遊びのコーナーがつくられている。教室の一方の隅の方には、コンピューター・ゲームができるようにゲーム用のテレビが置かれ、大きな円形のテーブルでは、子どもが椅子に座り、絵を描くようなコーナーが設けられている。三々五々はいってきた子どもは、自然と自分の好きな遊びを始める。子どもは母親と一緒にいたそれまでの家庭の生活よりもっと楽しい遊びを求めて、自然に遊びに入っていく。絵を描く子どももいれば、ウォータータブで水遊び、砂遊びをする子どももいる。一方のコーナーでは、積み木遊びをしている。

この二つの教室は、日本のように、二つの違ったクラスとして区切られてるのではない。四十名の子どもが、廊下でつながれたこの二つの教室を自由に行き来し、遊

んでいる。しかし、平均して、ほぼ二十名の子どもが、一つの教室で活動的な遊びをし、もう一つの教室では、静的な活動をおこなっている。

このナースリ・スクールでは、日本の保育園や幼稚園でよくみかける、一斉に交わされる「先生、おはようございます。みなさん、おはようございます」といった朝の挨拶は一切おこなわれない。降園のときも同じである。九時頃になって、母親や父親につれられてきた子どもは、教室に入るとすぐに、自分が遊びたいコーナーやおもちゃを見つけて、遊び始める。教師たちは、その週のスケジュールにそって保育が始まる前に、その日の子どもの活動の場を準備する。教室に次々に入ってきた子どもは、きわめて自然にその日の活動のなかに入っていく。そこには、号令や命令、一斉に行動するといったものは、ほとんどない。十時半頃のおやつもそうである。日本の幼稚園や保育園のように、クラスの子どもが一緒に集まって一斉におやつをとるというようなことはない。その時間になると、給食の先生が子どもが教室で遊んでいるときは教室の中央部の机の上に、子どもが園庭で遊んでいるときは、園庭の木陰の下の木のテーブルの上に置いておく。子どもは飲みたいときに自由にやってきて、そこでミルクを飲み、また、自分の遊びに散っていく。先生は、子どもを見守り、子どもの遊んでいるコーナーをまわって遊びを手助け、会話を交わす。

日本のいままでの保育の形態からすれば、「これ、本当に、教育をやっているの？」といえそうなものである。しかし、そこには、しっかりとした保育のポリシーがながれている。それは一人ひとりの子どもの個性や興味、能力に応じた保育をするということである［注1］。いやむしろ、これこそが本当の教育であるという思想である。

ここで、このナースリ・スクールの保育がすべてよい、といっているのではない。しかし、文化や社会が異なれば、保育や教育のあり方も大きく違ってくることは事実である。いまから四十数年まえの敗戦を契機に本当に考えなければならなかった教育の意味を、ここでもう

一度真剣に考えなおさなければならない。教育とは、一人ひとりの子どもの成長を保障することである。一人ひとりの子どもは、その能力において、興味において、性格において、発達する速度において、一人ひとりが異なるものである。個の存在とはまさにそういったことである。これからの国際社会のなかで生きる日本の幼い子どもたちの教育について、これからの時代にふさわしい幼児教育の構築が求められる。

日本保育学会シンポジウム

一九九三年五月、さわやかな青空の下、福岡教育大学において「国際化時代と幼児教育」と題する日本保育学会企画によるシンポジウムがおこなわれた。このシンポジウムでは、シンポジストとして津守　真、李　相琴、柴崎　正行、指定討論者として金田　利子、藤岡　佐規子の各氏を迎え、宮原の司会で、およそ六百名の参加者であふれるなか、真剣な討論がおこなわれた。

津守氏は、「国際化と教育」の問題について、子どもの教育こそ、世界平和への道につながるものであることを力説し、保育実践者が国際化の意味を考え、保育者自身が国際的な交流を経験し、さらに、国際化社会へ向け

ての保育者の再教育の重要性を訴えた。

李氏は、「いまなぜ、国際化なのか」という反問を提起し、幼児にとっては外国はすでに身近な環境として存在し、その国際的な環境と時代に則した人間像を探り、国際化時代の幼児教育とは、決してことばや洗練されたマナー、外国の歴史や文化、あるいは諸般の事情に関する知識といったものではなく、むしろ外国に対する親近感や外国を理解する温かい心情であり、平和への道は、幼児教育においてつくられることを強調した。

柴崎氏は、国際化時代に生きている子どもに対して、汚いもの、醜いものはいや、人とのかかわりはいやといった気持ちを捨て、外見やことばの違いを超えて積極的にかかわる気持ちを育てることの大切さを説き、そのための幼児教育関係者や行政上の問題等について言及した。

これらの問題提起に対して、金田氏は、これからの時代において、文化を越えた共通性、交流をどのようにすればよいかを指摘し、さらに藤岡氏は、実際に外国の子どもを受け入れている保育園の実例を紹介し、ことばの問題を超えて、相手を受け入れる心情を育てる大切さを訴えた。

さらに日本保育学会においては、大妻女子大学教授、平井信義氏による「子どもたちの今と未来－国際性を育てる保育」と題する講演もおこなわれた。このなかで平井氏は、子どもにとっての国際性とは「意欲」と「思いやり」を育てる保育を目標に、ボーダーレスの考え方にそった保育、はっきりとイエス、ノーが言える子ども、ユーモアのセンスをもち、相手の国の文化を理解し、それに共感できる人間を育てることをあげ、そのためには、保育者自身が地球的規模をもって考えることの大切さを求めた。

冒頭に述べたごとく、いま日本は一つの転機に立っている。しかも、日本がこれからの国際化社会のなかで進むべき道は、決して平坦なものではない。しかし、ここ

で銘記すべきは、いかなる困難な問題も、われわれ人間がつくりだしたものであるということである。政治を動かす人間も、国際貢献に身を捧げる人間も、そのすべては教育によってつくりだされたものである。すなわち、日本で、いや世界において起こるすべての問題は、教育の問題に帰結されるものである。おそらく、二十一世紀に生きる人間をつくるのも、これからの教育いかんである。しかも、乳幼児期の発達は、きわめて可塑的である[注2]。このことから、人間形成の根幹をつくるのは、幼いときの教育であるということである。

国連のボランティアとしてカンボジアで凶弾に倒れた中田君も、その行動のルーツは、子どもの頃のポーランドでの生活にあったと思われる。ユダヤ人を虐殺したアウシュビッツの悲劇を体験したことが、戦争の残虐さを憎み、平和を希求し、その後、一つの国家や社会を越えて、地球人として生きようとした中田君の原点ではなかったかと思われる。

二十一世紀は、まさしく、日本が世界のなかで、世界との協調のなかで、生きていかなければならない時代である。その時代はそこまできている。その時代に生きる、その時代にふさわしい人間を育てるために、その根幹としての幼児教育をここでもう一度考えてみなければならない。

（近畿大学九州短期大学）

[注1] 宮原和子・宮原英種編著『母親と保育者のための応答的保育入門』蒼丘書林　一九八七

[注2] 宮原英種・宮原和子著『愛情だけでは子どもは育たない―ハント博士の知的乳幼児教育』くもん出版　一九九二

第46回日本保育学会報告 Ⅱ

けんか場面と保育者

～三歳児のクラスで～

中村　万紀子

＊保育者が子どもに『どうしたの』と聞くのは、裁判官のようですね。

この言葉を本園の元園長、藤土圭三先生（カウンセリングが専門）になげかけられ、私は無性に気になりました。今まで何のためらいもなく、けんかの場面では特によく使っていたからです。幼稚園の中ではよくけんかが起きており、自分達で解決がつかなかったり、どう気持ちの整理をしたらよいかわからず戸惑ったりしている時や、何だかいつもと様子が違うなど気になった時に、私は「どうしたの」とそこへかかわっていき、子どもと一緒に考え、解決の方向を見つけようとしてきました。

実際の状況を自分がよく把握できない場合、尋ねる意味で「どうしたの」と聞いていたつもりでしたが、その

時々で保育者の感情も影響して、いろいろな響きの「どうしたの」が口に出てきたり、解決の方向へ急ぐあまり、子どもの今おかれている状態や気持ちを理解することがおろそかになり、「いったいどうしたの」と早く白黒つけたいというあせりがもしかすると表れてはいないかと疑問を持ち、反省するようになりました。

子どもと一緒に生活している保育者は、やはり判決を下すような裁判官であってはならない、よき理解者としてのかかわり方がまず大切にされなくてはならないだろうと思っています。子どもをどう理解するか、実際の保育場面で自分の対応はどうなのかを、けんか場面の事例を通して考察し、見つめ直したいと思います。

＊物のとり合いの場面

〈事例一〉　十月十七日

ドングリが入っているボウルをK君が持っていると、R君が黙ってそれを取ろうとする。K君「だめ、僕が使っているの」と断るが、R君は聞かずに力ずくで取り上げる。K君は腹がたったのだろう、R君を叩く。するとR君は足で蹴り返す。K君「返して」と泣きながら言う。R君は自分に抵抗してくるK君をどう感じたのだろうか、泣いているK君を片手で突く。K君は床に倒れて大声で泣き出す。いつ入ったらいいだろうか、K君とR君のどちらへ先にかかわったらよいかと迷いながら側で様子を見ていた私は、K君が床に倒れて泣き出した時、まずK君の気持ちに自分がなってみようと思い、「K君悔しいね」と声をかけるとK君はうなずく。K君を膝に乗せ、痛いという胸を擦りながら、「R君は貸してって言わずに取っていったね」とけんかの状況をK君と確かめるつもりで言うと、R君が取り上げたボウルを持って「貸して」と言ってくる。K君「いやだ、僕がつかうんだから」と怒った顔で言う。ドングリが欲しかったんだと思い、私はR君に「まだいっぱいあるよ」と紙の箱に入っているドングリを見せるが、「いやだ、こっちがいい」とR君は言う。ドングリよりもステン製のボウルが

欲しかったことに気づき「K君と同じ入れ物が欲しかったのかな」とR君に尋ねると、K君は黙って立ち上がり、ままごとの棚の中から、ステン製のボウルを探してきて、「はい、R君」と言って渡す。二人は何ごともなかったかのようにドングリと油粘土でごちそうを作って遊び始める。

＊

私は裁判官ではないという思いはあったものの、このけんかの場合に保育者はどうかかわったらよいか迷いました。確かにRの行動はよくないし、そのことを気づかせなくてはならないとも考えました。一方、KとRのそれぞれの気持ちを理解することも大事なことと考え、まず理解すること、その子の気持ちになることから始めてみました。同じ入れ物が欲しかったことを受け止めると、けんかはおさまっていきました。物のとり合いは、三歳児の場合、あの子と同じ物が欲しい、使ってみたい、あの子と一緒がいいんだと思う気持ちの表われと考えたいと思います。友達と同じことをして遊びたいと思う気持ちを大事に考え、同じ物がいくつか揃っていることは、大きな意味があると思います。

〈事例二〉　十二月四日

Y君はこの頃、毎日のように年長のクラスにおいてあ

る恐竜のマスコット人形を借りては持ち歩いて遊んでいる。前日返し忘れた恐竜のマスコットがこの日は朝から保育室におかれてあった。

登園してまもなく、M君が私の所に来て「Y君が僕の恐竜取った」と言う。Y君の姿が見えないので、M君と一緒に探しに行くと、Y君はいつもの恐竜を手にしていた。私「M君が先に使っていたのじゃないの」と聞く。Y君は黙って振り向きもせず遊ぶ。私「Y君、黙って取ったらいけないよ、僕も使いたいの」と聞くが、Y君は黙々と遊び続ける。M君は「僕の、僕の」と泣き出す。これ以上言っても無理だろうと思い、私は恐竜のマスコット人形が置いてある年長のクラスにM君を連れて行くことにする。それまで黙っていたY君が後からついてくる。私「M君いろんな恐竜がいるでしょう。お兄さん達に貸してもらおうか」と話しかけると、ついてきたY君が別の形の恐竜を一つ選んで「これMちゃんの」と渡そうとする。それでは気にいらないのかM君は怒ったままその場から離れていく。

＊

事例一に比べこの時の私の対応は「黙って取ったらいけないよ」と、保育者にはその時の行為をうわべだけでとらえ、早く解決させようとあせりがみられます。MとYのそれぞれの気持ちになってみた対応がなく、すぐにYに対し注意をしていますが、うまくいきません。この日は子ども達とラッカセイを炒って食べる予定があり、そろそろ始めようかと考えていたので、ゆとりを持った対応ができなかったのかもしれません。Yが今までずっと大事に遊んでいたこと、その姿をMは毎日見ていて自分もほしいと思っていたのかもしれないこと、この日誰も使っていないその恐竜を最初に見つけたMの喜び、いつも自分が使っていた物を他の子が使っていたのを見た時のYのショックなど後から考えると、もう少し二人の気持ちにその場で近づくことができたのではないか、そうすればまた違った展開があったのではないかと反省します。『貸して』というルールを言葉で教えこむのでなく、気持ちに訴えることで、その子がおのずとわかって

いくような保育者の対応ができたらと思います。

＊いつもと様子が違うと感じた時

〈事例三〉　十月二十日

運動場の隅に一人でいるK君を見かける。疲れているようにも見えたので、私は遠くから手を振ってみたが、K君の笑顔はみられず私の方を見ている。いつものK君だったら走り寄って来るだろうに…と気になって近づく。どうしたの？　と聞きそうになったが、これはいけないと考え「元気がないね」と声をかける。K君「僕が持っていたのをR君が取った」と言う。私「それは大変だ、それで僕はどうしたいの」と聞くと、「取り返したいの」と答える。私「じぁR君の所に行こうよ」と誘うと、K君「僕ずーっと探しているんだけど、R君いないんだよう」と悲しそうに又怒ったように言う。私が「先生も一緒に探してあげる」と言うなり、K君は急に元気になってまずは保育室のある方へ走り出す。K君の持っていたらしい物はりんご箱などに敷いてある発泡スチロールのネットということがわかったが、それはR君の発想でソーメン屋さんになっており、数人の子が遊んでいたので、別のネットを取り出してあげると、K君はもうそれには興味を示さず、別のもっといい廃材を見つけたと満足して遊び出す。

＊

この事例は、けんかの場面を知らずに、何かしら様子のおかしいKの姿がたまたま目に止まり、保育者がかかわっていった事例です。子どもがそれぞの場でいろいろな遊びをしている中で、保育者がそのすべてを把握することはできません。子どもとの信頼をもとに困った時には先生に言ってくるだろう、四歳、五歳と成長する中で、除々に自分たちで解決し、乗り越えていくこともうまくなってほしいと願い、そのように支えていきたいと考えています。もしかするとKは自分なりにつらさを乗り越えようとしていたのかもしれませんが、私は気になり、Kの気持ちに近づこうと「どうしたの」ではなく、

「元気がないね」と声をかけてみました。それがかえってよい方向へいったのではないかと思ったのは、もし私がKの立場だったら、「どうしたの」と理由を聞かれるよりも、「元気がないね」と声をかけられた方がホッと心がなごむのではないかと感じたのでした。先生は見てくれたんだと逆に、それまでの悲しさから解放され、心が安定するのではないだろうか、そしてそこから先を子どもは自分から見つけようとするのではないだろうかと思います。

*よくけんかのもとになる子に対して

〈事例四〉　十二月十日

K君とH君がBブロックで飛行機を作っている。R君が来て、K君の飛行機を取って行く。K君は大声で泣く。私「またR君、K君がこんなに泣いているでしょう。どうしてお友達の大事な物を取っていくの」と叱る口調で言っていると、R君と仲良しのH君も同じように怒った口調で「もう遊ばんぞ！　俺んち、もう来るなあ」と言う。私「K君やり返しよ」とつい言ってしまう。K君が叩くとR君も叩き返す。二月生まれで体の小さなK君と五月生まれで体の大きなR君ではK君の勝ち目はなく、痛々しくも感じ見ておられず、やめさせる。K君は自分のBブロックの飛行機が戻ってくると安心する。R君は涙を浮かべながら「K君が作ってくれないんだもん、もう自分で作る」と厳しい表情で作り始める。

*

私が「またR君」と感情的になり、R自身を否定するような言葉を言ってしまったために、仲の良いHまでもが「もう遊ばんぞ！　俺んち、もう来るなあ」とRを責める結果となりました。又、「K君やり返しよ」と明らかに力の差はわかっているはずなのに、こんなことを言ってしまったために、Kにはますます痛い思い、悔しい思いをさせてしまいました。この時、私はとても後味の悪い思いをしました。どの子に対してもすまないという思いが残り、こういうことがあった日、保育者はとて

▲　保育室風景

も疲れてしまいます。

よくけんかのもとになるRは、特にKに対して思い通りにしてしまいがちです。何でも取っていく、壊していく、幼稚園で発散しないとおさまらないような何かが背後にあるのではと感じつつ、どうしたものかと様子を見ているつもりだったのですが、ゆとりが持てなかったのでしょうか、事例二と同様とてもまずいかかわりをしてしまいました。保育者にとって十二月は、やらなければならない諸々の予定や計画があって忙しいのでしょうか。「K君が作ってくれないんだもん、もう自分で作る」の言葉に引っ掛かりました。Rは人の物がすぐ欲しくなり、そこでいろいろ問題が起きてきます。そのけんかを大切にしなければ、丁寧にみなければと反省します。人の物を黙って取っていく行為は断りつづけながら、Rの気持ちに近づき理解できれば、保育者が作ってあげることもできただろうし、Kが作ってくれるのを待つことも考えられると同時に、作ってもらった喜びから「僕ならもっとうまく作れるよ」と発想の豊かなRのこ

とだから、そのようになっていったかもしれない、と次々にいろいろな思いがでてきます。まずいかかわりで始まったけれど、Rが厳しい表情で作り始めた時に、見ているままに終わらず、そこでRへのフォローが必要だったように反省します。「そうか、R君の気持ちがわかったよ」と私も素直にRの気持ちに近づいていくことを続け、本当はこの事例の先のRへのかかわりがさらに大切だったのだと考えます。

おわりに

三歳児の場合、よくけんかの原因になる物のとり合いや待てないことは、表面から見れば自己中心で良くない行為だけれど、『友達と一緒のことがしたい、自分もしてみたい』という気持ちが強く表れた結果のことではないかと思います。そこのところの互いの気持ちを保育者がしっかりと理解した対応をしていけば、きっと相手の気持ちを考え、いずれ譲るとか待つとかいうこともできていけるのではないかと考えます。

一方、破壊的な行為をして起こる衝突には、保育者との信頼を基に、寂しさや不安感から解放され、人との関わり方が除々にうまくなっていけるように、特に愛情を持って、安定して遊べるように支えてあげる必要があると考えます。

このように頭ではわかっているつもりでも、実際の保育の場面ではつい感情的になったり、ゆとりがないと裁判官的な対応になったりとなかなか考えているようにはいかず、失敗の繰り返しです。失敗して再出発しながら自分自身も子どもから学び、育っていきたいと思います。

（山口大学教育学部附属幼稚園）

故国を後にして(7)

子どもたちの詩(二)

モーレンカンプふゆこ

アムステルダム補習校一年生、初めての詩の授業が又やってきた。「詩って何だろう?」とまず、ふゆこ先生。手がひとつ、ぱっと上がる。「先生、シってナマエのこと?」そうか、その次元か。「ううん、ナマエのことじゃないンだけどなぁ。」

何をどう説明したかわからない。(くわしくは「子どもたちの詩(一)」を参照90巻10号)説明が終わって、とにかく作ってみようということになる。

「たとえばね、お馬さんが走るでしょ。お馬さんはどんな風に走る?」誰れも何も言わない。外国で育つ子どもたちの弱点のひとつは、日本語の擬音である。「『パカパカ』でしょう?」シーン。そうか、その次元か。

「お馬さんはね、日本では、パカパカって走るのよ。パカパカパカ」

「バカバカバカ」最前列のヨウスケ君の辺

りから、すかさず小さなつぶやきがきこえた。大笑いになって、詩がひとつ。

わたしのお馬　　せんせい

わたしのお馬は
おバカさん
バカバカバカと　走ります。
雨が降っていたのよ

「ね、いいでしょ。おもしろいでしょ。」
「ぜーんぜん。」きょとんとした顔　顔顔。
意気ショウチンのふゆこ先生、気をとりなおして、詩と漢字を、いっぺんに教えちゃおうなんて欲を出す。

中　　先生

長ーい四かくの　まん中に
小さなねずみが　二ひきいた
けんかばっかり
　ちゅう　ちゅう　ちゅう
しかたがないので　まん中に
線を一本ひきました
お部屋が二つできたので
はい　仲直り　ねずみさん
中学生の　ねずみさん

「これどう？　いいでしょ？」シーン。
ゆみちゃんが言います。「ねこねこねこちゃん、またねんね。」ヤッターその調子！

ねこねこねこちゃん

ゆみちゃんとせんせい

ねこねこねこちゃん
またねんね
せなかまるめて
しっぽもくるり
「こ」の字のお鼻が
かわいいな
ねこねこねこちゃん
またねんね
わたしはおこたで
おべんきょう
「ね」の字と「こ」の字
ねこねこねこ

「ねえ、これはどう？」シーン。じゃあ、もう何でもいいから書きなさい。
そうして二時間後にでき上がった詩集。清書して、コピーして、皆でパチンとホチキスでとめて。

ゆめ

ふくい夏

わたしのかおに
かめが一ぴきはしってきた
夏がたすけてと
いったそのとき
でんわがなった
でもそれは
でんわじゃなくて
めざましどけいだった

わたしのくつした

ファンベイストらん

わたしのくつした
に　あなが
あいていると
おもうと
あいていないし

あいてないと
おもうときは
あいています
それは
あんまりおもしろ
いとおもいま
せん

うさぎ　えがわけいこ

あるひちいさな
うさぎがいました
だけどあのね
ちいさなうさぎは
おかあさんが
なくなりました。だけど
ちいさなうさぎは
ちいさな
ありをみつけました。
そしておとも
だちになりました。

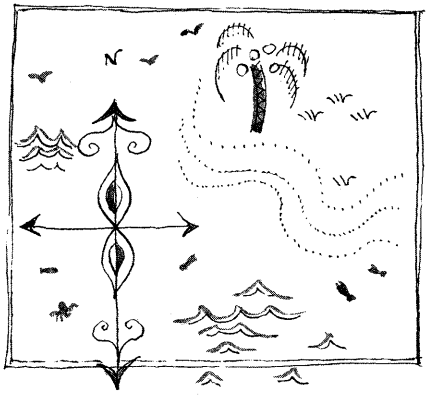
わに　小一年　むなかたみやび

きょうわたしのへやに
わにがいました。
わたしがベッドからおきたとき、
わたしはきぁーといいました。
そしたらわにが
「こんにちは」といって
わたしはまた
きぁーきぁーといいました。
わにはこういいました。
「あなたはいつも
きぁーきぁーというから」

何も私が教えることないんだけどなあ、と思いながら、職員室に引き上げる。見知らぬ代行の先生が詩集を見て、「わたしのお馬はおバカさん、だって？　バカバカバカと走ります、だって？　こ、こ、この子、て、て、て、天才ですよ！」

若い先生はコウフンして叫んでいたけれど、小賢しい大人の詩が、どれだけ心を和らげてくれるというのだろう、「バカ」。

（歌人・アムステルダム補習校）



堀合先生に学ぶ(7)

先生の提案・子どもの提案

立川　多恵子

堀合先生は今朝も母親やそれに代わる人と一緒に登園してきた子どもを靴箱のところで迎えると、一人ひとりに「おはようございます」と朝の挨拶をして、子どもの肩に手をかけたり、手をつないだりして保育室に伴う。

子どもによっては保育室に入ると、すぐ駆け出して行って、ロッカーにかばんをかける子もいるが、中には先生に連れられてロッカーの前に来て、手伝って貰ってやっとかばんをかける子もいる。先生は子どもの落ちつくのを見届けて、次に登園してくる子を迎えに行く。ロッカーにかばんや帽子をしまうと、早速遊び出す子どももいるが、部屋の中をうろうろ歩き回っている子、佇立したまましばらく友達の遊びをじっと見ている子など、さまざまであ

る。

出迎える子どもと一緒に先生が保育室に戻ってくると、部屋の中を見回して、時には遊び出せない子どものそばにミニカーをそっと転がすこともある。子どもによっては早速それを手に持って、床を走らせたりして遊び出す子もいるが、相変わらず他の子の遊びを見ている子もいる。先生は遊びのきっかけ作りはするが、それを子どもが受け入れるか、受入れまいかは子どもにまかせる。

先生は子どもがその子なりの遊びを自分から考え出すことを特に大切にしている。

子どもが降園した後で、私は先生に「今日、先生が予め用意なさったものは何ですか」と伺ってみた。先生は少し考えて「旗を用意したことでしょうか」と言われた。その旗というのは、朝、子どもが登園する前に先生が保育室にテープを使って飾ったものである。

先生のお話によると、それらの旗は昨年先生が卒園させた子どもたちが描いたものであり「もうすぐ運動会」という雰囲気を出したいと考えて、今朝保育室に飾ったものだ。

十文字幼稚園では運動会が近づいても、殆ど練習らしいことが行われるわけではない。そこで先生は三歳児にも運動会を楽しみにして貰いたいという願いから、黒板には運動会までの日数を〇で表わして、子どもたちと一緒に毎日、その一つ一つを消していっている。

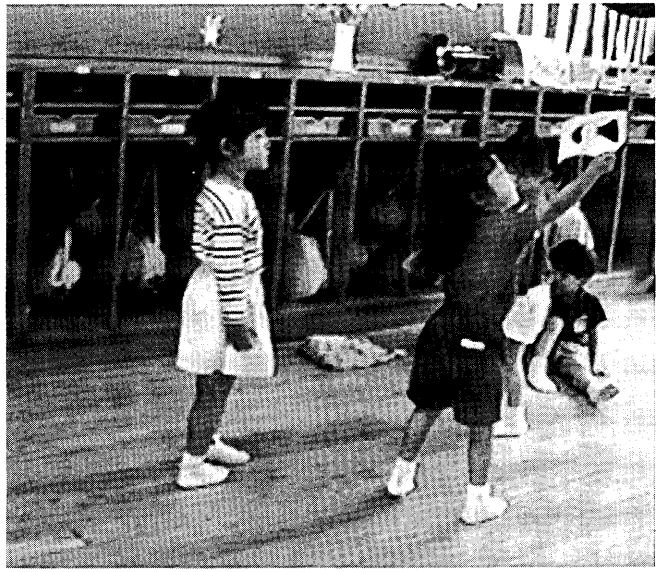
そういえば、今朝一番先にやってきたリサが「せんせい、きれい」と喜んで、頭の上に飾ってある旗に手を差し伸べた。しばらくしてゆきが先生のところへ「わたし、ハタかきたい」と言ってきたので、先生は早速白い紙を切って渡した。それにゆきは水色のマジックでうずまき状の線を描いた。それを見

ていたあいが「わたしもかきたい」と言ってきた。

最近は毎日お面を描く子で賑わうテーブルであるが、今日は旗を描く子どもたちで一杯になっていた。子どもの描く旗は、クレヨンで丸を一つ描いたものだったり、マジックで縞模様を丹念に描いたものだったりする。先生は子どもの描いた旗を「色がきれいね」とか「鳥が飛んでいるのかしら」と一枚、一枚認めながら受け取っていた。

ゆきは二枚目を描いてから、部屋に飾ってある旗を指さして「わたしのも、飾って」と言う。先生は早速ゆきの描いた旗をテープに結びつけて飾ってやった。ゆきの旗が飾られると、次々に「わたしも、ぼくも」と言う子がふえる。先生は旗つなぎに忙しくなる。

「あの時、先生は急に忙しくなってしまいましたね」と言うと、「私も、あんなに旗つなぎに忙しく



▶ 旗を飾っているゆき

なるとは予想しておりませんでした。何時もは旗をつなげるような仕事は子どもが帰ってからするのですが、今日はゆきちゃんにせがまれてしまったので……」

「入園当初あんなに不安そうだったゆきちゃんが変わりましたでしょう」と嬉しそうに話される。こんなに沢山の子どもが旗作りに興味を持つとは先生は予想していなかったようである。そのため最初にゆきが「わたし、旗作りたい」と言ってきた時、先生はあわてて棚にしまってあった大きな紙を取り出して切っていた。棚には何時も画用紙が用意されているが、先生は旗には薄い紙がよいと考えたのだろう。

その上引っ込み思案のゆきに「飾って欲しい」と言われて、ゆきの思いを是非、実現してやりたいと考えて頑張ったのだろう。次々に旗をつなぎそれを飾ることに一生懸命になっている先生に、子どもの思いを実現するためにひたすらになれる保育者の姿を重ねることができた。

先生が長年勤務していたお茶の水女子大の附属幼稚園では、運動会には子どもが描いた旗を飾ったそうであるが、十文字幼稚園では毎年万国旗を飾っているので、年長組の子どもの描いた旗は三歳児のための運動会の雰囲気作りに使われることになった。

保存しておいた旗を先生が飾ることによって保育室の環境が変化し、それに刺激されて子どもたちの間では旗を作ったり、飾って貰ったりする新たな活動が始まった。

先生も「最近すみれ組の子どもたちは、保育室に目新しいものをおくと、早速気づいてくれ、それを使って新しい遊びを考えだすのです」と話していた。

入園して七か月、子どもたちは一人ひとりが先生をとまり木にして、安心して園生活を送るようにな

り、小さな環境の変化にも気づいて、その刺激を受けて、その子なりのイメージを広げる余裕が出来たといえる。

降園時に堀合先生は子どもたちに「なぎさちゃんがさっき、どんぐりの歌うたいたいと言っていたけれど、歌いましょうか」と声をかけた。すると子どもたちから歓声が上がった。先生は早速立ったままピアノを弾きはじめた。

子どもたちはそれぞれ「どんぐりころころ……」と歌い始めたが、「ぼっちゃん一緒にあそびましょう……」と歌う頃には結構唱和して、きれいな歌声になった。二番を歌い出す子もいる。「どんぐりの歌、お教えになったのですか」と伺ってみた。先生は「別に教えておりませんが、子どもたちは家でお母さんか、お姉さんと一緒に歌ったことがあるのでしょう」と言われた。

▶ みんなで一緒に「どんぐりころころ…」

先生がピアノを弾かれるのを見るのは、二度目である。しかし子どもたちの歌声は思いの他、きれいなハーモニーになっている。どこでこれだけの力が育つのだろうか、改めて考えてみたい。

日ごろから先生は幼児のリズム指導は、日常生活の中に沢山の機会があると言われている。具体的にはどんな機会をいうのだろうか。先生は子どもの問いかけに応える先生の言葉はリズミカルであって欲しいと言う。「呼べば応える」といったうわべだけのものではなく、中身の調和も含んでいる。また先生は言葉かけばかりではなく、顔の表情にもそれが期待されると言う。子どものにこやかさに応える先生のにこやかな表情はすでにリズム指導になっていると考える。

このことはにこやかな表情への対応ばかりではない。怒った顔への対応も同じであり、相手への供応の適切さについて示唆していると考える。手をつないで歩く時にもリズミカルな動きが求められる。子どもが走る、先生がその後を追う。幼児の体の中に何時のまにかリズム感が育ってくる。

このように考えると、たしかに幼児期のリズム指導は日常生活の中にあると言えよう。そのためには先生の動きが物理的にも心理的にもリズミカルである必要がある。しかしこのことは大人にとっては案外難しい要求である。先生が長く日本舞踊を続けているのもこうしたリズム感を大切にしたいと考えているからだろう。先生が長い間力をいれている「オンステージ」も若い先生と共にリズム感を育て合いたいとする先生の工夫の一つである。

今日のどんぐりの歌を歌ったのはなぎさの提案だった。彼女は昨日も「どんぐりころころの歌をうたいたい」と言ってきたが、結局時間がなくなって歌えなかった。そのため今日もおかたずけの時になぎさが「どんぐりころころのお歌うたいたい」と

言ってきたので、先生は今日こそ歌う機会を作ろうと思った。

歌唱指導に熱心な幼稚園では子どもがなかなか先生の指導にのってきてくれないとか、歌わない子がいて困ると言った悩みも多い。しかし、すみれ組の子どもたちの「どんぐりころころ」の歌を歌うのを聞いていると、どの子も結構楽しんで歌っている。

子どもの提案を先生が取り上げて歌をうたいはじめたことがよかったのか、すみれ組では今までこうした機会が少なかったので、子どもたちがみんなで歌うということに新鮮さを感じたのだろうか。

先生のクラスでは時折子どもの方から「今日は何々したい」といった申し出がある。先生はそれらを受け止め、実現出来るように配慮している。

しかし例外もある。入園当初、みゆきが「先生、今日お帰りの時、紙芝居するのでしょう」と言ったことがあった。私は先生がみゆきの提案を受け入れて、降園時にきっと紙芝居をしてくださるにちがいないと期待していたが、そのまま降園になってしまったことがあった。その時私は「どうして紙芝居しなかったのですか」と聞いてみた。先生は「子どもからの提案は出来るだけ大切にしたいと思っていますが、降園時には必ず紙芝居を読むというパターンができると困ると思って聞き流したのです。みゆきちゃんはあの日だけでなく、時々『お帰りには紙芝居読むのよね』と言っています」と言われた。みゆきは幼稚園に入る前に近所の幼児教室に通っていたこともあって、「お弁当の歌、うたわないの」とか注文が多い。

子どもの主体性を育てるため、先生は何時もパターン化した今までの幼稚園教育の慣習を崩して行きたいと考えている。そこでみゆきの提案は聞き流される結果になったと言える。

子どもの提案は子どもの主体性を育てる上で尊重

▲　おかえりの集まり

していく必要があるが、提案の内容によっては、取り上げないで終わることがある。子どもの要求なのだからと、ただ盲目的に受け入れるのでなく、子どもの提案は、提案した子どもの気持ちを受け止めると同時に、クラスの子どもたちの園生活を楽しくして行くために生かしていきたいと考える。

（十文字学園女子短期大学）

ある日の育児日記から

(34)

佐藤　和代

有は一歳四か月になりました。今だにおっぱい大好き。さあそろそろ、断乳しなければ。

圭が断乳したときは、おっぱいに女の子の顔を描きました。それを見たときの圭の表情…びっくりして、まじまじと見つめた、丸い目。あれを、もう一度見たい！　あれは楽しい。

というわけで、先日、おっぱいにアンパンマンの絵を描いたのです。有がおっぱいを求めてきたときはもうドキドキ。胸をあけると…

わーおっぱいだー、とニコニコしていた有が、一瞬こわばった顔をしました。そして、数秒後、

またニコニコ顔に。

これで、おしまい。その後三日間、ときどきアンパンマンを確かめ、あとはもう、おっぱいを気にしなくなりました。

さて、この一部始終を大変な興味をもって見守ったのが圭でした。「有くんきたよ、アンパンマン見せたら」「今度はいつ見せるの」「圭のときは何の絵だった？」と、一日中、おっぱいの話ばかり。胸の絵を見せるときは必ず圭もいっしょ。

こうやって、自分の赤ちゃん時代を確かめられるのっていいですね。写真よりビデオより、リアルで劇的なシーンが見られるのです。これも上の子の特権かな、と思います。

これがおっぱいアンパンマンだ！

婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」(10)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林　恵子

二一

横浜、一八七四年三月十八日

アルバニーの職業学校の先生と生徒たちへ

皆さんたちからの小さな献金をとても嬉しく頂きました。いつも、皆さんたちが私のこと、その仕事の事を心におぼえて下さっていることは判っていますが、この献金を頂いて一層そのことを心に感じ感謝の気持ちで一杯です。それで、遠く離れた島国の日本で主イエスが私たちを祝福して下さっている仕事の幾つかをお話ししたいと思います。

主の恵みは数えきれないほど多く私たちに与えられているので、そのすべてをここでお話しすることはできません。もう、すでに皆さんたちは私たちのホームや学校のことについてかなり聞いておられると思いますので今回は日本の国で私たちが日曜学校を実際に開いたことをお知らせして喜んで頂きたいと思います。　……略……

あなたたちがご存じのように、このホームは特別

に子どもたちために開かれたのですから私たちはできる限りの事をして子どもたちのために役に立ちたいと思っています。

そこで私たちは子どものために日曜学校を開くことに決めたのです。日本での最初の日曜学校です。

今や多くの人たちが各地でいろいろな方法で教えていますが日曜日に聖書を学ぶことができるのは青年たちのための幾つかのクラスがあるだけなのです。しかも、私たちの日曜学校はアメリカのものと同じようにとても楽しく役に立つことを指導している日曜学校です。

もし皆さんが私たちを訪問して下されればお判りになるのですが、日曜学校の始まる様子を見たければ午後三時半きっかりにここに来て頂かなければなりません。日本人は時間の価値についての考えがなく時間厳守という事を学ぶのは最も難しいことの一つです。ですから私たちは日本人に接する時には時間を大切にすることを特に心がけているのです。

日曜学校の教室は大きくて明るく楽しい雰囲気の部屋で、小さな椅子と背もたれのない腰掛けを沢山用意しています。子どもたちは自分の家やお寺では畳に座っていますが、ここでは床に座らせたくないのです。平日にいつも使っている机をみんな壁ぎわの片隅に片づけ部屋の真中に椅子だけを置いています。

部屋の一方に教壇があって、その上に聖書と讃美歌とベルが置かれ二つの大きな籐椅子が並んでいて、教壇の側には小さなオルガンがあります。アルバニーの教会のものと比べたらとてもお粗末なものと思いますが私たちがもっと立派なものを買えるようになるまではこのオルガンがとても役立っているのです。

今は全部で四十名の子どもたちが来ていますが、その数はどんどん増えていますので皆さんがこの手紙を読まれる頃にはもっと増えていると思います。何人かはとても幼い子どもで、何人かはかなり大き

い子どもたちです。最初の礼拝は全員が一緒に座って行いますが、これはアメリカの日曜学校と殆ど同じです。それからクラスに分かれます。一番幼い子どもたちは先生に連れられ他の部屋に行きます。このクラスは私たちの幼児学級です。とてもお行儀がよく他ではちょっと見られないお利口さんの小さい子どもたちです。

大きな部屋では三つのクラスに分かれ、それぞれに先生を囲み輪になって座ります。先生の方を向いて熱心に聞き取ろうとする子どもたちの輝いた顔や賢い質問や応答のやりとりを皆さんたちが見ることができたら、ここで過ごす時間が教師と生徒にとってどんなに喜ばしいひとときだという事がお判りになるでしょう。

日曜学校が終わっても誰も疲れた様子はなく帰りを急ぐこともないのですが時間厳守は私たちの規則なのです。それに、もう少し聖書を勉強したいと思うところで止めておくほうが次の日曜日にもまた行こうという意欲をもたせることにもなるのです。

終わりの礼拝はいつもとても楽しいものです。時々参観に来る人たちは大変満足し興味を示してくれます。子どもたちは先週の日曜に配られていた聖句をクラスごとに暗唱します。そして讃美歌を歌い、立ったまま使徒信条を唱え、ひざまずいて主の祈りを唱えます。この礼拝が始まる前には別の部屋にいっていた幼児学級の子どもたちも再び大きな部屋にもどってきて一緒に礼拝を守ります。

こうして、私たちの日曜学校は五時に終わります。先生も生徒もみんな日曜学校に出席するのを特別な恵みと感じ楽しみにしているのだと私は思っています。

さて、皆さん、あなたたちが貯金して送って下さったお金のことを心から感謝しています。皆さんたちがわずかしかお小遣いを持ってない事は私もよく知っています。でも神様はきっと、お金持ちで何でも沢山持っている家の子どもたちよりもあなたた

ちの小さな献金をより良いものとして下さるでしょう。　……略……

いつも皆さんたちを愛しているお友だち

メアリー・プライン

＊

二三

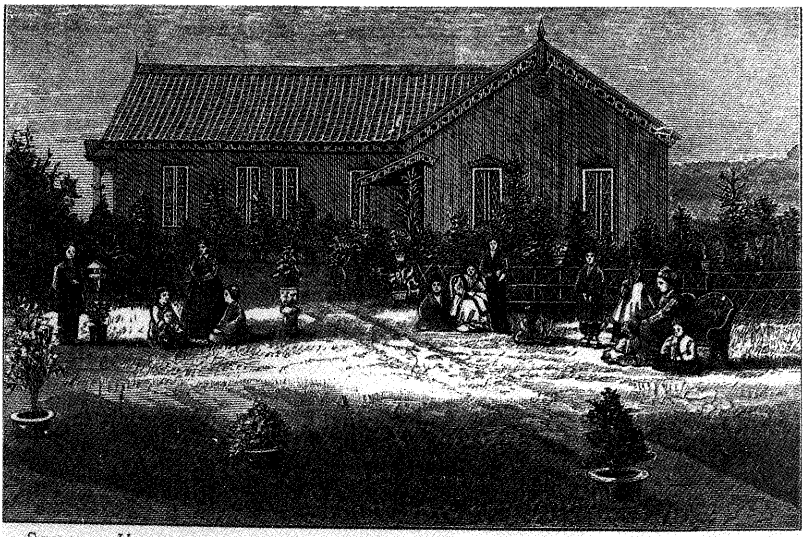
横浜　一八七五年一月十八日

アメリカの日曜学校の子どもたちへ

親愛なる皆さん、お目にかかったことはありませんが私たちはもう既にお友だちになった気がします。そこで私は皆さんたちにこの遠い国、日本での私たちのホームとそこでの仕事について長い手紙を書こうと思います。

アメリカの日曜学校の子どもたちと文通できるなんて、これ以上に嬉しいことはありません。皆さんたちにも是非この仕事を一緒に手伝って頂きたいのです。この手紙を書くにあたって、ただ一つ残念なのはこの仕事がどんなに興味ぶかく勇気づけられるものか、この仕事に携わることの幸せを私が思うようにありありと言葉で書きあらわせないことです。このミッション・ホームで神さまは私たちに大変良いものを与えて下さいました。この仕事を始めて間もなく大勢の可愛い子どもたちがイエス様を愛し祈ることを教えられ、また少女たちや小さな子どもたちがこのホームに来て日に日に元気になり、快適で幸せに生活している姿を見る事はこのホームで生活を共にしている私たち婦人宣教師にとって本当に嬉しいことです。実際にここに来て皆さんたちの目で見て頂ければどんなによく判って貰えるでしょうに。　……略……

この手紙に写真を一枚同封しておきます。（写真参照）どうぞ、じっくりご覧になって私たちの学校の外観がどのようなものか見て頂きたいのです。そして、この建物にいつも明るく幸福な子どもたちの



SCHOOL HOUSE OF THE AMERICAN MISSION HOME, YOKOHAMA. Page 172.
(From a Photograph.)

顔が満ち溢れている様子を想像して頂けたら幸です。この写真にはホームの子どもたち全員に集まって貰うことが出来ませんでしたのでほんの数人しか写っていませんが、子どもたちや少女たちの様子が判ると思います。そして神さまがこのような立派な学校と快適なホームを私たちに与えて下さったことが写真から判って下さるでしょう。

この学校は日本の女の子の教育のために設立された最初の無料の学校です。今は他にもう一つ学校があります。私たちがこの学校を立派に継続させ、この土地で神の栄光をほめたたえる事をどんなに熱望しているか、またアメリカのクリスチャンの人々の力によって設立されたこの学校の光栄と名誉のためにも立派に存続させたい事が皆さんにも判って戴けると思います。

この写真で横に見える大きな部屋が本館の教室です。そこでは私たちの学校の授業がなされるだけでなく、日曜日の朝の一つの礼拝を除いて日本人のた

めの教会の礼拝も行われています。また、ここではクリスチャンの少女たちの祈禱会も開いています。日曜日の朝には私たちのホームの礼拝もあります。全員が揃うと六十人以上にもなる礼拝がここで行われています。この建物の裏がわの部屋は縫物や書きものをする部屋になっています。

時間があれば私はホームの住まいの内部について、特に少女たちの勉強部屋についてお知らせしたいのです。少女たちは夕方になると自分たちの本を持って二つの大きなテーブルの周りに座って勉強します。彼女たちは本当によく勉強しますのでこちらから勉強しなさいと注意するよりむしろ適度の運動や遊びも忘れないよう見守ってやらなければならないほどです。次に私たちの素敵で新しい食堂を紹介しましょう。三十六人の少女と小さい子どもたちはついこの間までは床の上にぺたりと座ってお腹が空けば何時でもかまわず箸や手で物を食べ、規則や礼儀など考えていなかったのですが、今ではテーブルの周りに静かに行儀よく座ってテーブルクロス、ナフキン、ナイフ、フォークなどを使って礼儀のよいきちんとしたアメリカの子どもたちに負けないくらい立派な態度で食事をしています。食堂でこうした子どもたちを見るのは大変楽しいものです。次は小さな子どもたちの遊戯室を紹介しましょう。そこではどこにでも見られるような陽気で明るい子どもたちの仲間を見ることができます。数週間まえアメリカの親切な友だちが送ってくれたクリスマスの贈物を子どもたちにわけ与えたもので遊んでいる姿も見られます。次は寝室に皆さんを案内しましょう。特にお見せしたい一つの部屋には小さなベッドがずらりと並んでいて、小さい頭が枕の上にとても可愛らしくのっかっているのです。そこを通る時には〝イエス様、この小さな者たちを祝福して下さい〟と祈って子どもたちにキスをするため立ち止まらずにはいられません。

さて皆さん、これらのものすべてをどうか想像し

てみて下さい。そして日本の若い人たちをイエスの愛に導くために私たちを援助することをもう一度考えてみて頂きたいのです。　……略……

さて、ここでアメリカの親切な一人の婦人によって経済的援助を受けている一人の女の子のお話をしましょう。皆さんもきっと喜んで下さることと思います。それは「おその」という名前の女の子ですが頭がよく、とても良い子です。私たちはこの子の勉強がぐんぐん進歩し明るくて行儀のよいのを見てとても喜んでいます。

二週間ばかり前、彼女は母親に会いに行きました。彼女の父親は金持ちの貴族でしたが、その家庭は今では貧しいのです。でも、彼女の父親に対する世間の評判は以前と同じように今も尊敬されています。台湾で戦争が始まったとき彼は高い地位に任命され、軍隊と一緒に台湾に行きました。でも数週間のちにそこで熱病にかかり死んだのです。このため、この子の母親は気の毒にも一人残され今は家族の生計を支えるのに援助もなく苦境に陥ったのです。おそのが家に帰っていた時、台湾攻略の最高指揮官で彼女の父親の畏友であった西郷はおそのに母親と一緒に彼の家を訪ねるようにと言ってきたのです。二人が西郷の家を訪ねると彼はおそのに勉強していることをいろいろ質問した後に彼女が読んだり歌ったりするのを聞いて日本人で彼女のように英語を上手に発音するのを聞いたことはないと喜び感心したというのです。そして、かれはおそのが先生になる準備ができたらすぐに薩摩で一番立派で大きい女学校の先生にすると約束してくれたのです。薩摩というのは西郷の生まれたところで、彼はこの地方で強い影響力と権力をもっていたのです。これを聞いて彼女の母親がどんなに安心し、おそのを勇気づけたか、また先生になろうと勉強している他の少女たちにも励ましとなったか皆さんたちにもよく判って頂けると思います。これは、神の助けによって福音の流れがこのホームから美しい日本の国の隅々ま

で流れていくことを願っている私たちにとって大きな喜びでした。

おそのは二年半前、このホームに来たのですがその時には英語はなに一つ知りませんでしたし、日本語もほんの子どもの話す言葉しか話せなかったのです。彼女は今、十一歳すこしになりますが勉強についてはアメリカン・スクールの同年代の少女たちの大半よりずっと進んでおり、この教室の誰よりも流暢に正確に朝の祈りの言葉を読むことができます。

親愛な友だちである皆さん、私たちの事業はこうした子どもたちによって実際に成果をあげている事が判って頂けると思います。あなたたちが愛し仕える主に日本の子どもたちを導くため皆さんたちができることを何でもしようと主があなたたちの心に働きかけて下さる事を信じています。

主イエスによる真実のお友だち

メアリー・プライン

最初の手紙はプラインが日本に来るまえに勤務していた故郷、アルバニーの職業学校の生徒にあてて書いたものである。僅かなお金ではあっても皆が貯金して送金してくれた事を心から感謝し、ホームで始めた最初の日曜学校の様子や礼拝の守り方を詳しく書いている。小さい子どもを対象として聖書や讃美歌を教える日曜学校は新教ではおそらくここが最初のものと考えられる。幼児にとっては午後三時半から五時までは多少無理があると思われるがおそらく兄や姉と一緒に来たもので聖句の暗唱などは大きい子どもの唱えるのを聞いていたのであろう。珍しいこともあって大勢の子どもが集まってきた当時の日曜学校の様子が想像できる。

次の手紙はアメリカの日曜学校の子どもたちにあてたもので、この手紙には写真がついており、「おばあちゃんの手紙」の本の最初に掲載されている。この写真は『横浜共立学園の一二〇年』写真集に「二一二番に最初に建てられた校舎」として向かって右端のベンチに腰かけているのがプライン、中央の椅子に座っているのがピ

アソン、左方に立っているがクロスビーと説明されている。

この学校は日本の女の子の教育のために設立された最初の無料の学校と記されているが、当時のアメリカは南北戦争を機として人道主義にもとづく運動が盛んで特に宗教団体によっていろいろな社会改良事業がすすめられた。混血児の教育と女子教育のために設立されたこのホームは米国婦人一致外国伝道協会によって設立されたものでアメリカの多くの教会の婦人会の人々の献身的な経済の支えを受けていた。また、教え子や日曜学校の子どもたちなどの小さな献金もミセス・プラインたち婦人宣教師にとっては心の支えとして嬉しい贈物であった。

食堂で西洋式のテーブルマナーを教え、これをよいものとするやりかたには今の私たち日本人として反発もしたいところであるが、当時の婦人宣教師たちから学んだ規則や時間厳守などは恐らく日本人の最も苦手なことだったと言えよう。

「おその」は「木脇（きのわき）その」が彼女の名前で明治五年、八歳でこのホームに入寮した。亡き父の友人、西郷従道（西郷隆盛の弟、海軍大臣、陸軍大臣の経歴）の邸に呼ばれ従道の前で流暢な英語を話し、感心され後に鹿児島で立派な女学校を建てるから先生になってほしい言われたという。彼女は実際には明治十五年卒業後、この共立女学校で長く英語と音楽を教えた。〈註1〉

（国立音楽大学）

〈註1〉『横浜共立学園一二〇年の歩み』横浜共立学園一九九一年　一三三頁

息子の通う小学校の隣に小さな児童公園がある。放課後は低学年の子を中心に子ども達でにぎわうが、二か月程前からそこに一人の青年が来て、子ども達とよく遊んでくれるようになった。はじめのうちは、近所のお兄さんが遊んでくれているだけの風景として親の目にも映っていたのだが、あまり頻繁に見かけるので母親の一人が話をしたところ、彼はガードマンの仕事をしているので昼間は時間があり、子ども達と遊ぶのはボランティアのつもりだと話したという。

その母親は「いつも子ども達がお世話になって…」とお礼をいって見守ることにしたのだが、どうしても不審感がぬぐえず、学校に相談した。学校も学区域内のしかも隣の公園のこととあって、すぐに教頭先生がその青年に話をしに行った。善意であろうことを前提としているのであまり根ほり葉ほり聞き正すこともできず、とりあえずは、子ども達と遊んでくれるのはうれしいが一応公園の中でだけにしてほしいと伝えてきたそうだ。

子ども達は彼を「兄き」と呼んで慕っている。それでも時々、手錠や警察手帳の様なものを見せたりもするので、親の方は〝何か怪しげな人〟という思いからぬけられずにいた。

しばらく様子を見ているうちに噂が広まり、校長先生や警察までもが様子を見に来て青年にいろいろ質問していった。その後、公園で彼を見かけなくなった。

子どもをとりまく環境に見知らぬ人が入ってきた時、どう受け入れるか。国際化とまでいかずともこの狭い地域でさえも大人はとまどっている。彼の行動が常識的な手順をふんでいないからといって拒否反応を持つ前にお互いに理解し合う方法はなかったのだろうか。これで、おこったかもしれない事件を未然に防ぐことができた、という声もある。しかし、「結局、私達大人が地域や学校ぐるみであの青年を追い出したのよね。」という一人の母親の言葉が耳に残る。　（K）

幼児の教育　第九十二巻　第十号
（一九九三年十月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

平成五年十月一日　発行
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
東京都文京区本駒込六―一四―九
振替口座　東京九―一九六四〇
電話〇三―五三九五―六六〇四

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。
●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

新教育要領が望んでいる自主性を育てる保育に必要な
援助の仕方と子どもを見る目を養う保育実践書。

年齢別保育実践シリーズ

〈全5巻〉

第1巻 0~1歳児の遊びが育つ

編集／小川清美

人間の一生の中で最もドラマチックに発達を展開する0~1歳代の子どもの姿をとらえるもの。

第2巻 2歳児の遊びが育つ

編集／野本茂夫

自由に歩けるようになった2歳代の子どもがいろいろな環境とかかわりながら成長していく姿をとらえたもの。

第3巻 3歳児の遊びが育つ

編集／平山許江

集団生活に入りにくい3歳代の子どもの遊びから、友だちづくりと生活習慣の自立と遊びへの姿をとらえたもの。

第4巻 4~5歳児の遊びが育つ

——遊びの魅力——

編集／河邉貴子・戸田雅美

子どもが興味を持つ遊びの魅力はどんなところにあるのか、身近な保育の中からとらえたもの。

第5巻 4~5歳児の遊びが育つ

——遊びと保育者——

編集／河邉貴子・戸田雅美

つぎつぎと変化する子どもの遊びに保育者はどのように関わっていけばよいのかについて考える書。

このシリーズは幼稚園教育要領・保育所保育指針の基本にそって編集しました。現場の保育者、保育者養成担当の研究者の方々にとって「遊び中心の保育とは何か」は重要な課題です。
この課題に具体的に応えるため、年齢別保育の実践例を中心に考察を加え遊びの発達が見通せるように工夫しました。

編集責任 東京学芸大学教授 小川博久

A5判　1~4巻 264頁　5巻 288頁
定価 各2,000円(税込)

全3巻セット（第3巻~第5巻）
セット定価 6,000円(税込)

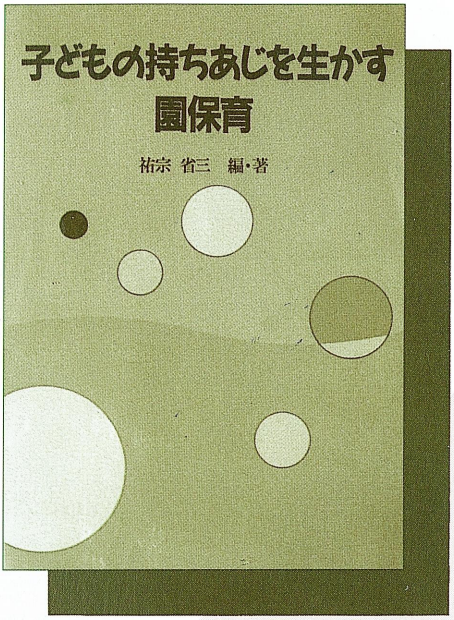
全5巻セット（第1巻~第5巻）
セット定価10,000円(税込)

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

子どもの持ちあじを生かす園保育

一人ひとりの持ちあじを生かす園保育の考え方から実践まで。



早いけれど荒っぽいものを作る子、遅いけれどきちんと作る子など、いろいろな持ちあじの子の実践例を集めて、指導の基本をまとめた本です。
個性を育てる保育に悩んでおられる先生方におすすめします。

祐宗省三　編・著

A5判・240頁・定価1,700円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館